世紀末を生きる

世紀末を迎えて、世の中はかつて私たちが夢見たばら色の未来ではなく、戦後半世紀の今まで気づかなかった負債が一気に噴出した状況を露呈しています。

ところで、テレビは時代を映す鏡の役割をするものだと言います。

最近のテレビに気になるコマーシャルがあります。缶コーヒーのＣＭで、地獄もコーヒーブレイクの間は天国になるといったものと地獄の典獄がコーヒーブレイクしている間、地獄は天国という2種類があります。ダンテが『神曲』で描いた地獄のようでもあり、その粗雑で矮小な画面はいかにもパロディ的でもあります。

さて、地獄を知らない人はいないでしょうが、逆にその存在を信じる人は今や少数派かもしれません。だからこそ、地獄をパロデイにしてしまうＣＭが作れるのです。

日本人にとって地獄とは、平安時代の恵心僧都源信が『往生要集』で描いた恐ろしい地獄に他なりません。それは絵に描かれ、各寺院で人々に説法の題材として使われました。上方落語の人間国宝桂米朝氏の「地獄八景」は地獄を素材にした名作名演として名高いですが、決して地獄そのものを馬鹿にしているわけではありません。地獄の存在を自明のこととした上で、面白おかしく人情味もある噺が展開します。

昔の人は、正しく生きるために、地獄の存在を心に思い描いて誘惑に弱く悪道に陥りが

ちな自らを戒めました。今の私たちはテレビのＣＭで地獄を笑いものにする一方、自らに歯止めが利かず倫理性を失い欲望にさいなまれる荒廃した社会を生きています。ダンテの時代、教会は「死を思え」と人々に説きました。恵心僧都源信は、末法思想に苦しむ平安の人々に阿弥陀さまの極楽浄土を説くために地獄を具体的に示しました。世紀末に生きる

法然上人

私たちが地獄を忘れ去ることとは、逆にこの世を地獄に近づけることに他なりません。

お盆のお勤めには「破地獄偈」をお唱えし地獄を破って餓鬼に施し、その功徳をご先祖様に供養するのですから、地獄を忘れてはお盆の意味はありません。心中の餓鬼と地獄の存在を、今一度思い起こすことが、世紀末を私たちが人として正しく生きるためにぜひ必要だと思います。